

氏 名	コンドカル グラム モアゼム Khondaker Golam Moazzem
学 位 の 種 類	博 士 (地域研究)
学 位 記 番 号	地 博 第 7 号
学位授与の日付	平成 16 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	ア ジ ア ・ ア フ リ カ 地 域 研 究 研 究 科 東 南 ア ジ ア 地 域 研 究 専 攻
学位論文題目	Transformation of Economic Relations of the Poor and the Rich in Rural Bangladesh : Focusing on Credit Market in a Potato-Growing Village (バングラデシュ農村における階層間経済関係の変容：馬鈴薯生産一農村の金融市場に焦点を当てて)
論文調査委員	(主 査) 助教授 藤 田 幸 一 教 授 水 野 廣 祐 助教授 安 藤 和 雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、バングラデシュ東部・クミッタ県一農村の調査に基づき、1980年代以降に同国で一般に生じた農村経済発展の中で、農村の貧困層と富裕層の間の階層間経済関係、特に金融関係がいかなる変化を遂げたかを実証的に示し、その意義について論じたものである。

1980年代以降に加速した農村経済発展は、調査村では農業および非農業の両部門で生じ、農業はコメ3作と馬鈴薯を合わせた年4作の高度な集約的土地利用体系に変貌し、またジュート工場労働、公務員、リキシャ引き、馬鈴薯商人、その他小商いなどさまざまな農外就業機会も出現した。さらに、中東を中心とする海外出稼ぎも、村人の重要な所得獲得機会としてウェイトを高めていった。貧困層にとってはとりわけジュート工場労働が重要であり、また中東への海外出稼ぎも、湾岸戦争後に貧困層の参入が相次いだ。こうして富裕層のみならず貧困層の就業構造も大きく変わり、貧困層の所得が上昇・安定し、貯蓄余力も大幅に増加した。調査時(1999~2002年)には、土地なし世帯・零細農などの貧困層の大半は、海外出稼ぎを含む、かなり安定した非農業就業に就くようになり、農業賃労働は、遠く離れた貧しい農村から流入する季節労働者によって担われるようになっていた。

以上のような経過を経て、村の貧困層が、農地を質とする未組織金融取引(ボンドクと呼ばれる)におけるかつての借り手の立場を逆転し、上層農である富裕層に逆に資金を貸し付け、担保として農地を獲得するという傾向が明瞭になっている。貧困層から富裕層に向かうこうした金融の「逆流」は、既往の研究でもその存在がすでに指摘されているが、富裕層が借りた資金をいかに使っており、したがって「逆流」が村の経済循環全体の中でいかなる意味をもっているかについては、十分検討されてこなかった。

本研究では、富裕層による農業・非農業のさまざまな投資機会への投資の収益率を推計した。その結果、ボンドクにおける資金調達コスト(年利約15%)を上回る利回り、すなわちトラクタ、灌漑井戸など農業機械への投資では35-89%、海外出稼ぎへの投資では23-32%、馬鈴薯の流通への投資では約30%の利回りを得ていることが判明した。

一方、貧困層は、ボンドクを通じて資金を貸し付けた場合は約15%の収益率に甘んじ、また湾岸戦争後の中東出稼ぎの収益率も12-23%程度にとどまっていることが判明した。上記富裕層の海外出稼ぎの収益率の高いのは彼らがシンガポールやマレーシアへ出稼ぎ先をシフトしたことによるものである。

しかし貧困層の所得・貯蓄余力増大は、これまで信用供与を媒介とする従属的關係にあった富裕層との経済関係を一変させた。たとえばかつては化学肥料を商人から信用購入し、農産物販売の際に不利な条件で商人に販売せざるを得ないという状況が一般的であったが、現在では肥料の現金購入が一般的となっている。またかつて1980年代には冷凍庫所有者を頂点とする垂直的統合關係にあった、馬鈴薯の生産・流通における農民、商人、冷凍庫所有者の關係も端的な例の1つである。かつては、都市中間層である冷凍庫所有者が、農民や商人に前渡し資金を融通し、生産された馬鈴薯の冷凍貯蔵・販売の多く

の部分を集荷し、支配していたわけであるが、現在では、各経済主体は、生産、流通、冷凍サービス供与にそれぞれ専念するようになった。現在でも冷凍庫所有者はその利用者に信用を与えている（冷凍庫貯蔵期間に応じて若干異なってくるが、月利1%未満の計算になる）が、それは馬鈴薯の生産・集荷のための前渡しではなく、あくまで冷凍庫利用者に対するサービスであり、その目的は垂直的統合関係の維持ではなく、冷凍庫の稼働率向上のためである。こうした変化の背景には、冷凍庫の増加および競争の激化に伴って冷凍庫所有者がその稼働率向上により腐心しなければならなくなったこと、そして馬鈴薯の都市消費市場の成熟に伴って、高度なマーケティング技術が要請されるようになったというような事情がある。

貧困層は、工場労働や海外出稼ぎなどで安定した現金所得をあげ、また貯蓄の一部を貸し付けて富裕層から農地を獲得し、それを利用して飯米をより多く生産・確保することができるようになった。また馬鈴薯生産に典型的にみられるように、富裕層の高利貸資本の犠牲にならないような経済関係の構築に成功した。そういう意味では、経済発展の「均霑」効果は間違なく農村貧困層にも及んだということができよう。

しかし同時に、貧困層の貯蓄は年利15%程度の低い利回りでしか回っておらず、より高い利回りを実現している富裕層には立ち遅れている。それは今日のバングラデシュ農村における「均霑」効果の限界を示すものといえる。

論文審査の結果の要旨

人口稠密度が極めて大きいバングラデシュの農村部では、農業だけでは生計を立てることができない土地なし世帯や零細農が激増している。また1971年の独立戦争及びその後の混乱が経済を著しく疲弊させ、74年には深刻な飢饉にも見舞われた。経済が上向きはじめるのは70年代末からで、80年代以降、好調な農業に引っ張られる形で、比較的順調な経済発展の軌道に乗り、現在に至っている。しかし、最貧困バングラデシュの貧困削減はいまだに国際社会挙げての課題である。

こうした中で、農村の経済発展と貧困削減を阻害する要因として、貧困層の低所得が富裕層の信用供与への依存を招き、そこで高利を搾り取られるがゆえに再び低所得に陥る、といった貧困の悪循環の存在がしばしば指摘されてきた。

本論文は、1) 1980年代以降の農村経済発展の中で、そうした悪循環を生む構造自体が消滅し、貧困層が経済的自立を進め、またむしろ逆に富裕層に資金を貸し付けるような、大きな事態の変化が生じたことを実証的に示し、2) そうした変化の要因、変化の具体的様相、その意義を論じること、を大きな目標として掲げている。

本論文は、バングラデシュ東部のクミッタ県から1つの村を選び、そこで集中的に調査をし、一次データを収集・分析するという方法を採用した。悪循環構造の具体的分析として取り上げられたのは、1) ボンドクと呼ばれる農地を質とする未組織金融、および2) 換金作物として重要な馬鈴薯の生産・流通システムであった。

ボンドクは、かつては、零細土地所有者が資金を借りる見返りに農地の用益権を質として提供し、返済不能に陥れば最終的には農地を失う可能性もある、そういう主要ルートであった。しかし、現在までにその機能は逆転し、貧困層が資金の貸し手で農地を獲得する立場に一変した。その指摘は既往の事例研究の成果を再確認するもので、先駆性はないが、事例の積み重ねという重要な意味をもつ。本論文の真の貢献は、これをさらに一歩進め、資金の借り手である富裕層がボンドクの利回り（年利約15%）を上回る利益率をあげていることを実証的に示したことである。それによって、インフォーマル金融の「逆流」を手放しに評価するのではなく、大きな経済循環の中では貧困層は相変わらず後手の立場にあることを説得的に示したことになる。

また馬鈴薯の生産・流通では、かつて農民や小商人は、冷凍庫所有者から前渡し金を受け、それを通じて搾取されていた。しかし、本論文は、緻密な実証分析により、現在までにそれがなくなり、より対等な経済関係が構築されたという事実を明らかにしたわけで、それは大きな学問的貢献である。

なお馬鈴薯の流通に関する本論文の経済学的分析は、緻密さと完成度において特に高く評価できる。

また本論文は、投資収益率の推計の一環として行った、海外出稼ぎの収益率の推計においても、顕著な学問的貢献を含んでいる。特に、湾岸戦争前後で、中東における未熟練労働の実質賃金率が大きく下落し、その一方ですでに出稼ぎに行った知人・親類を通じた労働移動が可能になって移動のコストやリスクが低下したため、貧困層も参入が容易になったこと、収益率としてはかつての年利30-50%から12-13%へ大幅に下落したこと、したがって村の富裕層（の子弟）は中東出稼ぎに魅力を失って、シンガポールや、マレーシアにシフトしたこと、という一連の記述・分析の学問的貢献は大きい。

以上、総括すれば、本論文のメリットは、1) 1980年代以降の農業・非農業両部門にわたる農村経済発展の結果、バングラデシュでかつて存在した上記悪循環構造が非常に弱くなり、あるいは消滅したこと、したがって経済発展の「均霑」効果が確かに存在したことを実証的に示したこと、2) しかし、貧困層がボンドクで資金を貸し付けて飯米生産用の農地を集積することや収益率の低い中東出稼ぎに参入することにとどまっており、かつ富裕層が貧困層から借りた資金でより高い収益率を上げていることなどから、その「均霑」効果が一定の限界をもつものとして理解する必要があることを指摘したこと、の大きく2点に整理することができる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成16年1月27日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。